

PROFILE

赤羽 悟 美

東邦大学医学部医学科生理学講座統合生理学分野



本年4月1日より東邦大学医学部生理学講座統合生理学分野の教授を拝命いたしました。1949年に(旧)生理学第一講座として発足して以来、朝比奈一男名誉教授(運動生理学)、鳥居鎮夫名誉教授(睡眠生理学)、岩村吉晃名誉教授(体性感覚・神経生理学)、有田秀穂名誉教授(呼吸・情動・脳生理学)が築き上げた生理学講座を引き継ぐ責任の重さを感じております。

私は、中学生の頃から神経生理学や海洋生物学に強い興味を抱いていました。大学へ進学してからは、念願のスキューバダイビングのサークル活動に没頭し、年間50日を海で過ごして天然の顔黒金髪渋谷系ギャルとしてキャンパスライフを満喫していました。有田秀穂先生は、私が学生時代に所属していたスキューバダイビング・サークルの創始者であり、不思議なご縁を感じます。さて、そんな私でしたが、生命科学と基礎医学に関わる研究をしたいと考えて薬学部に進学しました。薬学部では、特に薬理学と生理学の講義に引き付けられました。そこで、毒性薬理学教室・福田英臣教授の下で研究指導を受けました。先生方や先輩方々から神経生理学と実験科学について薫陶を受け、研究の面白さと奥深さにすっかりはまり込み、実験に没頭するようになりました。修士課程の途中で助手に採用して頂き、その後、脊髄運動神経細胞の興奮性調節機構に関する研究で学位を取得しました。1989年に着任された長尾拓教授の下で、電位依存性Ca²⁺チャネルとβアドレナリン受容体の研究を始動しました。細胞内Ca²⁺シグナルの研究技法を学びたいと考え、当時、心筋Ca²⁺シグナル研究の先駆者の1人であったMartin

Morad教授(Georgetown大学、米国Washington DC)の下へ留学しました(1993年~1995年)。Morad先生をはじめ留学中に素晴らしい先生方に出会い感動し、基礎医学の研究者としての道を歩む覚悟を決めました。帰国して以来、心筋Ca²⁺シグナルの制御と破綻のメカニズムの研究を進めてまいりました。2002年に一條秀憲教授が着任され、細胞内シグナル研究の進め方や技法についてご教授頂きました。2005年4月に東邦大学医学部薬理学講座・水流弘通教授の下へ助教授として着任して以来、水流先生からの温かいお励ましを頂き、これまでの研究を循環器疾患や脂質代謝異常の基礎メカニズムの研究へと発展させてまいりました。2010年に杉山篤教授が着任され、不整脈や循環薬理学の研究方法を学ばせて頂きました。これまでにご指導いただいた先生方からたいへん多くのことを学び、その一つ一つが今日の私の研究の礎となっております。

今後は、分子・細胞内器官・細胞・臓器・個体レベルの研究を統合して、Ca²⁺シグナルに加えて代謝および炎症の制御と破綻のメカニズムを臓器間ネットワークとして統合的に解明することを目指して、研究を推進していく所存です。

近年、医学部においては、生理学をはじめ基礎医学の研究を志す学生の減少が危惧されています。一方、米国の基礎医学研究では、M.D.Ph.D.のみならず多くのPh.D.が活躍しています。「医師は臨床研究を行い、基礎研究はPh.D.に任せるべきだ」という極論を唱える先生もいらっしゃいますが、私は、基礎医学研究を支える優秀なPh.D.の育成も重要であると考えます。薬学部と医学部

で研究と教育に携わった経験を生かして、基礎医学研究の将来を担う M.D.Ph.D.と Ph.D.の育成に力を注いで行きたいと考えております。

今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒、宜しく願い申し上げます。

略歴

1985 (昭和 60) 年 3 月 東京大学薬学部薬学科卒業
1987 (昭和 62) 年 1 月 東京大学薬学部助手(毒性薬理学教室)

1992 (平成 4) 年 7 月 博士(薬学)取得
1993 (平成 5) 年 8 月 Martin Morad 教授(米国 Georgetown 大学医学部)の下へ留学
1995 (平成 7) 年 10 月 東京大学薬学部復職
2005 (平成 17) 年 4 月 東邦大学医学部助教授・准教授(薬理学講座)
2013 (平成 25) 年 4 月 東邦大学医学部教授(生理学講座統合生理学分野)